

陸自駐屯地紹介シリーズ 第38回

九州の空を守る 飯塚駐屯地

第3 高射特科群・第2施設群他

駐屯地シリーズ編纂委員会

飯塚への道程

陸上自衛隊飯塚駐屯地は福岡県のほぼ中央、筑豊地方、筑紫山地の西端付近の盆地にある。今回は福岡空港から飯塚までバスを利用するルートを使用した。飯塚には取材前日に入り一泊した。翌日午前中には駐屯地司令に取材の時間を頂いており、その時間に遅れないための用心である。日曜日夕暮れの商店街は飲食店を含めて殆どの商店がシャッターを下ろしていた。シャッターのペイントは何処も新しく、廃墟の雰囲気は何処にもない。日曜日が商店街の休日なのである。だが今までに多くの都市郊外で地域活性化の方策に血道を上げていた姿に接したことのある筆者には、書き入れ時の日曜日に休むことは理解に苦しむところであった。ホテルには夕食サービスの機能さえないので夕食を摂るため歩き回ったが開いている店は見あたらなかった。漸く探して居る中に只一軒明かりをつけた

小さなラーメン店であった。余りきれいな店ではなく客の居ない店内に入ると、人生に疲れたような中年の男女が二人でスポーツ新聞を覗き込んでいた。「失敗だったかな」、だが既に空腹は限界を超えていた。作る二人は無言、出来上がりを待つ当方も無言、流れる時間に演歌のうらぶれた風情を感じ取りながら待った。出来上がって一口スープを啜ったところ予想に反して素晴らしい味であった。「これが長浜ラーメンと云う奴か」生まれて初めて替え玉と云う物を追加注文した。

飯塚駐屯地

翌朝新飯塚駅からJRバスに乗り丁度8時に自衛隊営門前に着いた。バスを降りると、そこかしこにツツジの花が目に入った。とりわけ正門前右側の大きな石を重ねた斜面に植えられたツツジの花の紅の鮮やかさは印象的であった。

営門から真っ直ぐ北西方向に道路が延び、両側に5棟程の隊舎が見え、そ

の周りには樹木が植えられて緑が映え、豊かな色彩の、落ち着いた雰囲気を作り出していた。警衛所受付に進み、取材来隊の旨を述べるとすぐ中から応答があった。予め待機していた広報班員である。かれこれ40分歩くと左側最初の隊舎一階の広報室に入った。

駐屯地朝礼

ソファアに腰を下ろした途端隊内に鳴り渡る放送を聞いた。駐屯地月例朝礼が始まった所だという。「こんな取材の好機を逃す手はない。陸軍時代の先輩に今日の駐屯地朝礼というものを紹介出来る」。せきこんで案内をお願いし、早足で急いだ。隊舎の東側、約6分程低くなったグラウンドの朝礼場では既に朝礼が始まり、定年退官者3名の紹介が行われていた。マイクを通して駐屯地司令高橋勝夫陸将補、陸自81防25)が一人一人の所属部隊、氏名階級、経歴、功績、退職後の進路を紹介し、纏めとして長い自衛隊勤務間の尽力に対して感謝、退官後の家族ともどものご多幸を祈る言葉を贈った。

紹介を終えて駐屯地司令が降壇し代表者の挨拶に移った。一言々に力が籠もった声であった。無理もない、長い自衛官生活を全うした晴れの日の挨拶である。退官者は挨拶を終え全隊員と敬礼を交換すると降壇し、部隊下手に移動し、そこから駐屯地音楽部の奏

楽に合わせ、部隊の前を敬礼しながら上手に行進し、階段を上り隊舎の影に消えて行った。その行進を全隊員は拍手をして見送った。約80分離れた台から見ていた筆者は、その場に流れる雰囲気や全神経で感じ取ろうとした。退職者の紹介の言葉には、「駐屯地司令が職務として定年退官者を紹介する」のではなく、「長い国防の勤めに従事した先輩の定年に際して駐屯地の後輩を代表して惜別の言葉を述べている」と云う和らぎが流れていた。また「家族共々のご多幸を祈る」と云うくだりには、長期演習、部外工事、災害派遣、或いは海外勤務の間留守を守った家族のご労苦に対してのねぎら



いの真情が込められているのを感じ取り、光景を目に焼き付け、言葉を耳の奥に残し、醸し出された雰囲気胸に納めた。

退官行事が終わると、女性自衛官の声で1カ月間の出来事がトピックスとして紹介された。中で400cc献血者80名、200cc献血者2名、駐屯地司令を初めてとする5名の骨髓バンク登録者があった事、4月に実施された自衛隊協力者、隊員家族のヘリコプター体験搭乗結果、曹友会員による地域イベント参加、5月の駐屯地行事予定、今月の月間目標、駐屯地隊員の結婚、及び赤ちゃん誕生が紹介された。トピックス紹介が

終わると司令が再度登壇し訓辞が始まった。内容は職務や規律に関する事柄を直接的に強調するものよりも、駐屯地司令個人の哲学を披瀝し、その内容を通じて強固な使命感確立へ誘うスタイルと感じた。記憶に焼き付けただけでなく表現の異なるところが有るかも知れないが趣旨内容には間違いは無いはずである。

- 1 先ず家族を大切にしよう。それを広げるにより愛国心に繋がります。
- 2 夢を持ち、ロマンを追い求めよう。その事はパワーの源になります。
- 3 それぞれに与えられた任務を確実に果たそう。隊としての、更に自衛官

としての大きな任務は各個人の小さな任務完遂あつてこそその結果です。

4 日頃の生活にメリハリを付けよう。良い仕事をするためのエルネギーとなります。

5 感謝する心を持ちましょう。昨日は母の日でした。6月は父の日です。ささやかでも良い、感謝の想いを伝えよう。本当に喜ばれるはずですよ。

訓辞の余韻が長く尾を曳く中を駐屯地朝礼は終わり部隊は解散した。

月例朝礼の姿

ここで全国各駐屯地で行われる月例駐屯地朝礼の姿を紹介したい。

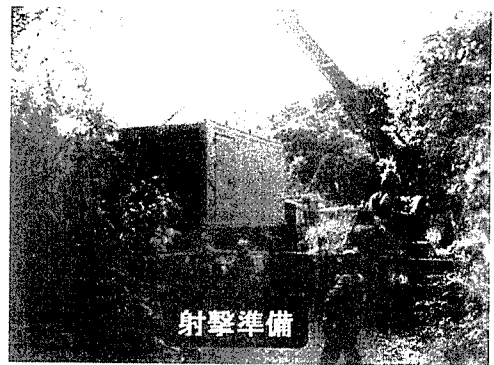
各駐屯地では、月に1度、或いは4半期に1度と定期的に駐屯全部隊が参加する駐屯地朝礼が行われる。その朝国旗掲揚(一般的には8時、又は8時半)の前に部隊毎に整列し、整列完了に合わせて駐屯地司令が朝礼場に臨場し国旗掲揚の準備が完了する。時報に合わせラッパ若しくは国歌の流れる中、当日の警備員3名により国旗が掲揚される。

終わると司令の声で駐屯地司令が登壇し敬礼を受けその後行事紹介、善行や競技成果、功績紹介、退官紹介などが続き、その後駐屯地司令の訓辞があつて終了する。この朝礼には部隊の団結、士気、規律の振作、大行事への心構えなどいろいろの目的達成に貢献

訓練状況 (3高群)



陣地進入



射撃準備



射撃準備完了



米国ミサイル発射

している。

福岡県点描

福岡県には2カ所の分屯地を含め8カ所の陸上自衛隊施設があり、その中に陸上自衛隊飯塚駐屯地がある。取材に先立ち分県地図「福岡県」を求めて福岡県の地勢を頭に入れた。

先ず関門海峡を越えて九州側に入る。昔日の門司、小倉、八幡、若松の名前で知られた工業地帯があり、今は合併して北九州市として生まれ変わっている。九州入り口の門司から西へ約70kmに博多湾（別名福岡湾）を抱くように福岡平地が開け、行政、文化、商業の中心「福岡市」が開けている。この中心は湾の東肩部から西に志賀島まで突き出した天然防波堤と西肩部を形成する糸島半島という地形が博多湾の良港の条件を満たし、更に朝鮮半島を経由して大陸へ最短経路の港として古代から開けていたことを想像させられるところである。博多から更に南に約40km進めば久留米市、さらに33km進めば大牟田市に至る。

北九州市西部の折尾から遠賀川に沿って約30km遡ると飯塚市である。ここはかつて筑豊炭田地域の中心的都市として繁栄を極めた街であった。因みに「筑豊」と云う呼び名はそれほど古い言葉ではない。明治18年に筑後地方と豊前地方の5石炭坑業組合が合同し

て組合を作った時、その名に「筑豊」と名乗ったのが最初であるとされる。また飯塚には陸軍時代の兵営は無く、この地方の壮丁は福岡の聯隊に入営していた。靖國館行文庫所蔵、杉江勇氏著、秋田書店発行の『福岡連隊史』に

依れば歩兵第24聯隊、第124聯隊、歩兵第153聯隊、歩兵隊26聯隊の他大東亜戦争終戦間際に編成された部隊であったとされている。飯塚から多くの若者達がこれらの部隊に入営したのである。その代表としてあげられるのが歩兵第24聯隊である。この聯隊の軍旗拝受は明治19年8月17日、日清戦争の約8年前の事である。その後日露戦争、シベリア出兵、大東亜戦争と激戦を潜り多くの将兵が尊い命を捧げた歴史をもっている。飯塚に縁ある陸軍部隊として詳述したいが、その歴史を伝える品々は、どうやら福岡駐屯地に収められている様子、いずれ福岡駐屯地取材の成果として詳述したい。

駐屯地概史

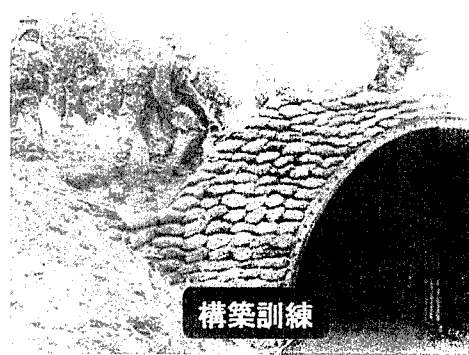
先ず駐屯地史の概要を紹介したい。

- 1 大正9年頃 炭坑坑道跡に充填する砂を採取場所として開発が始まる
- 2 昭和35年頃、産炭地振興策として自衛隊誘致運動開始
- 3 昭和38年 飯塚市議会 自衛隊誘致を議決
- 4 昭和40年 駐屯地建設完了

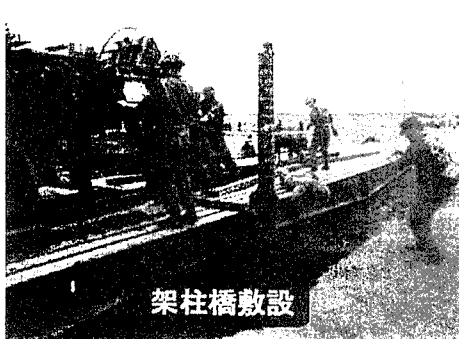
訓練状況（2施群）



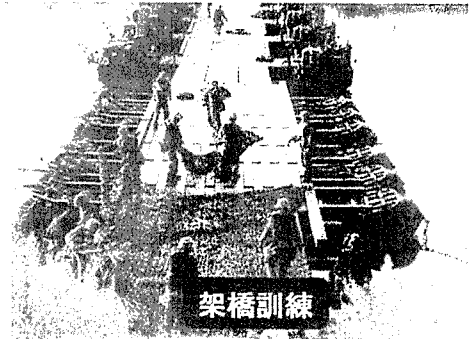
施設作業



構築訓練



架柱橋敷設



架橋訓練

5 昭和41年 小倉、大分から施設部隊移駐

6 昭和46年九州初のホーク部隊新設

7 昭和48年 第2高射特科団新設

8 平成15年 後方支援態勢改編

駐屯地所在部隊

現在の駐屯部隊を紹介したい。

第2高射特科団本部及び本部付隊

九州沖繩を防衛担任区域とする西部方面隊隷下部隊の第2特科団の司令部であり、九州全般の防空戦闘を担当し指揮運用に任ずる部隊である。

高射特科団長、1等陸佐の副団長、高級幕僚その他各科長があり、これに団本部の支援を行う2佐の隊長が指揮する団本部付隊が配置されている。隷下部隊としては飯塚駐屯地に1等陸佐を指揮官とする第3高射特科群、長崎県大村市竹松駐屯地に同じく1等陸佐を指揮官とする第7高射特科群が配備されており、所在は九州北部に偏在しているがその担任範囲は西部方面全域として、対空ミサイル・ホークを装備している。その機能は昔日のそれと様相を大きく異にしていること、諸賢既にご承知のことと考えるが、先ず対空戦闘情報の有機的連接である。現在航空自衛隊のレーダーサイトには陸上自衛隊から連絡幹部が派遣され、レーダー情報はそのまま高射特科団にリンクされている。次いで射撃指揮機能の

電子化である。射撃指揮は砲側ではなく、対空戦闘指揮所の電子機器を介して行われる。

次に敵味方識別の電子化である。この機能は空自レーダーの段階から第一線部隊の自衛対空戦闘火器・ステインガーにまで系列化されている。また団隷下に搬送無線中隊をもつて居るが、これによりかなり強力な無線回線構成能力を持つ部隊となっている。難点は、射撃訓練場がない事である。ミサイルの実弾射撃訓練は渡米しなければならず、対空機関砲L90は北海道静内対空射場、鹿児島県佐多対空射場に制限されている。

第3高射特科群

高射特科団隷下のミサイル発射機、補足レーダー、追隨レーダーを装備する1等陸佐を指揮官とする部隊である。

西部方面後方支援隊

第102高射直接支援大隊

西部方面総監に直属する西部方面後方支援隊の隷下で、第2高射特科団の補給整備を支援する部隊であり団の野外展開に追隨して支援を行う部隊である。なおこの大隊の一部は長崎県大村市の竹松駐屯地で所在を同じくする第2高射団第7高射群を支援している。

第2施設群

平成15年に群本部及び本部管理中

隊、築城中隊、障害中隊、機動支援中隊、交通中隊、坑道中隊という機能別に改編されたそれぞれの中隊からなる施設部隊である。九州・沖繩の全域にわたる施設全般支援方面隊及び4師団・8師団・第1混成団の施設力増強に任じる西部方面隊直轄の第5施設団(本部、福岡県小郡駐屯地)の隷下部隊である。装備品を活用して平成15年の遠賀川氾濫の際には大活躍をした部隊である。

第103施設支援直接支援大隊

第1直接支援中隊

西部方面直轄の西部方面後方支援隊(佐賀県直達原駐屯地)の隷下部隊で、第2施設群の整備補給の支援を任務とする部隊である。この部隊の直上部隊第103施設支援直接支援大隊は福岡県小郡市の小郡駐屯地に所在する部隊である。

飯塚駐屯地業務隊

飯塚駐屯地において施設の管理、物品補給・給食、福利厚生、衛生支援を行う部隊であり方面直轄部隊である。その他第422会計隊、第304基地通信中隊派遣隊、警務隊、情報保全隊がある。駐屯地朝礼終了後、資料をいろいろと探し出して閲覧した中に幾つかの興味ある事があった。

駐屯地用地取得経緯

て口述した記録である。事は昭和35年代、日本全国の石炭産業にかけりが見え始めた頃である。衰退した地域経済のキャンセル注射として工場誘致などが提唱され、その先鞭として国営工場等の誘致が当時の池田総理大臣自らの関心事であった。紆余曲折の末、自衛隊駐屯地の飯塚市への誘致が決まった。

筑豊の史跡

第二は駐屯地広報班が編集した「筑豊の紹介」なる筑豊の史跡等を知る上で参考になり要約された資料である。それにより再確認したことは、この地に古代からの史跡が点在することであった。現在大小1千に及ぶ古墳群があり、国特別史跡、国指定史跡とされているほか優れた出土品もある。中世には長崎街道の宿場街として賑わい、近代には日本近代化の礎たる石炭産出の場として栄えていた。そしてその時代々々を語る多くの史跡が掲載されていた。例えば今なお残るボタ山、嘉穂劇場、炭坑主伊藤邸、同じく炭坑主麻生邸など、かつての繁栄を語る風情があった。時間の余裕があれば是非見学したいところである。

駐屯地司令表敬と取材

取材申請の回答の中に駐屯地司令への表敬・取材の時間を頂けるとのことが含まれて居たときの嬉しさは一種独特

特のものである。記事に奥深さが増すからである。

団長室で間近に對した印象は、青年期後期のスポーツマンと云う印象であった。柔道や相撲ではなく、剣道か近代5種の選手を思わせるシャープな体型である。当方から第一に切り出したのは駐屯地朝礼の印象であった。退官行事全体に流れる雰囲気にとのほか暖かさを感じ、退官後十余年を経た筆者には自分のことの様に嬉しさを感じたと述べたとき、静かな笑みが返つて来た。

次いで骨髄バンク登録の所以を尋ねた。返答は「全ては世のため、人のため」と云う駐屯地司令としての統率方針を自ら実践したのだとの事、手続きにあたった日赤職員の見学を想像してみたい。骨髄バンク登録者は現下の血液ガン治療上の急務であるにも係わらず、思うように数は伸びない。それが国家機関に献血を求め出張したところその機関の長が自ら骨髄バンク登録にに応じてくれた。心に響くものがあったに違いない。

次に遠賀川―直方水辺マラソンに挑戦された理由をお尋ねした。警備担当区域を自分の足で廻る事に意義を見出したとのこと、やはり根底に職務と責任感がありだったようだ。

いよいよ本題に入り、様々な特技か

らなる高射特科団の教育訓練に触れた。何といつても最大の弱点は、国内に射場がないことで、実射を伴う訓練には渡米が必要である。しかしこれも又見方を変えれば「災い転じて福となす」ことが出来る、我が自衛隊の優秀さを米国を初めとして諸外国に見せつけて一目置かせるまたとない機会であるという。

我が国のホークミサイル部隊は、米軍のシステムを導入したものであるが、日本民族独自の優秀さを発揮して更に磨き上げたものであり、諸外国に無い域に達していると胸を張って言えるとのこと。現に昨年の渡米実射撃訓練と検閲に於いては極めて優秀な成果を挙げ、胸ポケット上の小さな印章に限りない誇りを感じつつ訓練場を闊歩したとのことであった。

個人的には北方重視から全周重視に変換した現在、運用構想、訓練目標の変化などがあるはず、尋ねて見たい誘惑に駆られたが記事に出来る事ではないと白制して直接の質問を飲み込み回り込んだ質問をかさねた。そして集めたのは、現在は九州全域で、迅速に機動し、厳しい訓練を重ね、今後も苦闘が続く筈だということであった。

次は飯塚取材を決定した初期から質問したいと思っていたが質問出来なかつたことである。高射団長といえど

も答えがあるはずが無く、以下は筆者が日頃から防空にたいして関心を持つている政治やマスコミに対する者のごまめの歯ざりしりと受け取って欲しい。多くの人々が懸念している軍事情勢変化がある。北朝鮮の弾道ミサイル保有である。彼の国の最高首脳部が正常な判断力を失い、弾道ミサイル攻撃を脅しの手段として外交的脅迫に及んで来たとき、その一撃に對抗する手段は我が国に確立されていない。第一撃を甘んじてうけるのか、回避して外交時に屈辱を繰り返すのか、「そんな馬鹿なことはあるはずがない」とは言い切れない屈辱を過去我が政府は繰り返してきたといえないか。弾道ミサイル攻撃に対する対策が急がれるところである。

表敬と取材の予定時間は瞬く間に過ぎ「駐屯地全員が一丸となつて任務に邁進している」様子を実感して団長室を辞した。

退官者見送り

駐屯地朝礼で紹介された定年退官者の一人が本日定年を迎えて離隊するのを駐屯地全員が見送るとの事で取材することにした。時間は午後授業開始直前で、駐屯地の隊員は営門に向かう道路に集合し、警備隊員、駐屯地音楽部員が整列した。駐屯地司令を初め幹部が警衛所付近で見送りの列に加わり、

音楽隊奏樂と共に行事が開始された。定年退官者が道路の両側に並ぶ隊員に敬礼しながら警衛所に向かって歩み始めた。駐屯地司令の前で厳正な拳手の敬礼をし、部隊全員が万歳を三唱した。そして警衛隊に正対すると敬礼を受けた。

定年退官者の脇に若い隊員が付き添っていることに気が付いた。広報班長に尋ねると「子息だ」という。定年見送りに家族も招待する習わしであるが、今回は子息が同行したとのことである。退職自衛官の顔に父親としての得意そうな表情を感じ取った。

全景を記憶に留めて

取材の時間も終わりに近くなり、駐屯地の全景を目に焼き付けた。初夏の瑞々しい緑が目映えて、そこに住む人々の落ち着いた生活が予想された。残念なことは、炭坑時代の繁栄の名残の史跡を見る時間的余裕が無かつたことである。帰りの航空機の中ではせて写真でもと広げた。

今回取材にあたり駐屯地司令高橋勝夫陸将補、第2施設群第1科長林克也1尉、飯塚駐屯地広報班長加藤清司3佐に心から御礼申し上げたい。

文責 松村興延 陸自64